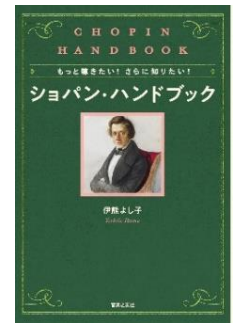


『もっと聴きたい! さらに知りたい!  
ショパン・ハンドブック』伊熊よし子 (著)  
音楽之友社 2025.10\*

本書は、①ショパンの生涯、②ショパン国際コンクール課題曲の解説、③「ショパン弾き」と称されるピアニスト 50 人のショパン観という、3 部構成から成っている。

第 1 部の生涯の概観では、ショパンがパリの上流階級の子女に対してどのようなレッスンを行っていたのかをうかがわせる箇所が興味深い。とりわけルバートに関する記述は示唆に富む。弟子たちが説明するショパンの指導には、「さまざまな声部のニュアンスを際立たせ、音符の長さの違いを印象づける」と細やかに特徴を捉えるものもあれば、「左手は正確な拍を保ち、右手は自由に歌う」とするものもあり、その多様さが印象的である。また、ショパン自身が、楽器に対するタッチの熟達や音楽理論を学ぶ重要性を説いていたことも紹介されている。

第 2 部では、ショパン国際コンクールの各ステージで課される作品について、聴きどころとともに解説が加えられている。単なる楽曲解説にとどまらず、ショパン演奏に不可欠なルバートやマズルカのリズムについても扱われており、ショパンをこれから演奏しようとする学習者にとって実践的である。さらに、コンクールにおいて演奏の成否を分けるポイントにも踏み込んでいる。たとえば練習曲 Op.10-2 では第 3・4・5 指の訓練の重要性が、Op.10-6 では繊細なタッチの変化が問われることが指摘されている。

また、ミツキエヴィチの詩のバラードへの影響について、前号で紹介した『ショパン—その足跡をたどる第一歩』が個別の作品からの影響関係は否定していたのに対し、本著は具体的な詩篇を挙げて関連

性を指摘している点も興味深い。

本書の大きな特色は、第 3 部における 50 人のピアニストへのインタビューにあるだろう。20 世紀を代表する巨匠から、2018 年に初開催されたショパン国際ピリオド楽器コンクールの入賞者、さらには 1990 年代生まれの若い世代まで、ショパン演奏者として名高い幅広い奏者の言葉が採録されている。そこで語られる内容は、自然なルバートやマズルカのリズムといった演奏様式に関するものと、ショパンの演奏を通じて、楽譜や自己の内面と誠実に向き合うことの重要性に関するものとに大別できる。

たとえばメナヘム・プレスラーは、音楽の「美」を見いだすために演奏すると語り、それを音楽における愛情表現と位置づける。ケヴィン・ケナーは、楽譜と向き合い、作曲家が音と音の間にどのような感情を託したのかを考えるべきだと説く。さらにダン・タイ・ソンも、作品の形式を理解したうえで、自らの言葉として自然に語ることの大切さを述べている。

これらの言葉から、音楽を極めるということは一時的な努力によって成るものではなく、人生を賭けて人間性の成熟と共に深めていくライフワークなのだと思わせる。

ショパン国際コンクールを鑑賞する際はもちろん、ピアノ学習者や指導者にとっても多くの気づきを与えてくれる一冊である。(徳田貴子、ピアニスト、会員)

## 《新会員のひと言》

## 風野中と申します

はじめまして、このたび協会に入会させていただきました風野中と申します。

知人が「ポーランド協会には色々な方がいらっやって楽しいワヨ」と声をかけてくれたのがきっかけでした。

安藤会長からの送付資料により、ポーランドに関して多種多様な取組みをされていることが分かり驚きました。初めてにもかかわらず総会から出席させていただき、午後のポエジアにも参加しました。顔見知りの方も何名か居ましたが、皆さまのフレンドリーな雰囲気のおかげでワインもおいしくいただくことができました。



かつて家族でドイツ、フランス、スイスなどを周遊して、歴史を大切にされた建造物や暮らし方の違いなど心に刻まれましたが、残念ながらポーランドには立ち寄ることができませんでした。

海に囲まれた日本に生まれ育ってきた者として、陸続きの国境で複数の国と接し生活している方々の文化を知りたいと考えていました。

ポーランドについては、ショパンとアウシュビッツ、連帯運動などを知っているに過ぎません。これからは、遠いヨーロッパで激動の歴史を持つ国の文化や思想などを会員の皆様との交流を通して学びたいと思います。

よろしく願いいたします。(かぜ・やちゆう、詩人)